

翻刻『俳諧歳時記』(十六了)

播本眞一

はじめに

本稿は、「翻刻『俳諧歳時記』(一)」〜「同(十五)」^(註)に続き、曲亭馬琴(一七六七〜一八四八)が享和三年(一八〇三)に刊行した『俳諧歳時記』(二卷二冊、横本)を翻刻するものである。今回は、下冊「雑之部」二百五十一丁ウラ五行目から同「雑之部」二百六十六丁オモテ最終行(奥付)までを対象とした。凡例などは前記拙稿(一)を参照していただきたい。

『俳諧歳時記』翻刻

俳諧歳時記雑之部 江戸 曲亭主人纂輯

一座五句の物 端 戸 世 頼 常 百 千 咲 火の字

更 上 屋 けりと留る句 なりと留る句 してと留る句。

千句に一句の物 女 鬼 天狗 病名、下の句に留てと

め、名の神 名の仏 狼 龍 虎 麒麟 鳳凰 幽霊。

人倫になる物 身 誰 我 他 関守 田守 士師へ獵

師、山士のたくひ) 老 汝 己 独 苗代守 網代守。

折合 折合とは、上の句のとまりの文字を、下の句の腰の

句の切にあるをいふ。 別吟 同字別吟は、文字に四声の

わかちあるが如し。されど、俳諧の別吟は、あへて平上去入

の四声にも拘らず、只、体用を異にする文字をもて別吟と称

す。たとへは、難波に浪○大和に大○紫に筑紫○春日に春、

今日○勅命に命(二百五十一ウ)南無に無き○関に関白○朝

廷に朝○行ひに行く○親子に金子・弘子等の類ひ也。その余

はなすらへてするへし。別吟は附句をきはらず。

新宅の会に破るゝ、燃やける夢、忽にさめる夢を忌也。祝

義には、哀傷、無常。追善に、沈む、うかまぬ、地ごく忌へし。社の中の会にこゝろえあるべきは、しづむ、波立かへる、流るゝ、吹嵐、只一つには限れとも、山の名あらは又もきかまし。年は一つ、述懐一つ、とせ一つ、今年といふて歳暮有べし。降雪は懐紙一つにひとつ也。四つに一つはにせものゝ雪、聳物、降物ならて月はかり、只晴るゝとはせざる也けり。

右諸書より拔萃して、初心の人の便りとす。句数を書るものは立圃が『花花草草』よろし。しかれども、その品すくなうして分別しがたき事多し。それより後の物は、論する所も又異にして、初学の人まどふことすくなからず。句去の式、大かた此の如しといへとも、猶その一卷によりて差略有べし。いかにとなれば、一卷のはこび、一折の見わたし、三句のわたりあしければ、仮令句去を逃れたりとも、附て手がらなしと知るへし。(二百五十二オ) **夏の花** 余花 残花は春なり。若葉の花 青葉の花は春也。花に杜鵑 花にほととぎす、結ひて夏也。 **秋の花** 花火 夜分なり。花相撲 植物にあらず。花燈籠 夜分也。花火、花灯籠、植物にあらず。 **冬の花** 帰り花 只かへり花と斗あるへし。 **餅花** 植物、食類に二句去。 **雑の花** 作り花 植物にあらず。 **絵の花** 同上。花結び 造り花に准すべし。 **花真壺** 花の絵ある壺也。絵の花に准すべし。 **花鞞** 花形 鼓などにいふ所、植物にあらず。 **花塗** 同。 **花かい**

らき 鞞鮫にもやうある也。絵の花に准すへし。茶の花香

食類なり。花子の狂言 人倫なり。燈の花 夜分なり。

花鱈 食類なり。花毛氈 花の毛氈。花筵 (二百五十二

ウ) 此類、句体によるべし。花の下に敷たる毛氈、或は花を織たる筵ならは春也。花嫁 花聲 人倫也。句体によりて恋なり。詞の花 言語なり。植物に二句去。声の花

上に同じ。花やき 絵の花に准す。花やか 栄の字也。しかれども和訓花やかとは称美の詞なるゆゑに、正花とすと

いふ説あり。花紅葉 雪月花 雪月花は、月、花の座を持つべし。雑也。すべて両季かねたるは雑なり。互におもき景物

なればなり。花実 同上。 **非季の詞** 柴守の神、雪山、竈、雷、鳩、放生河、橘の都、柞の森、柳の水、柳か浦、桜

田、桜川。桜人 契沖の説に、桜は所の名にて、人は伊勢人、近江人などいふが如しと。しからは雑たるべし。諷訪

祭 此祭年に七十余度あり。菜摘川、鹿毛の筆、鶴の巢、鷹の巢、忘れ草、むらさき。藻に住虫 音鳴は秋也。黒

牡丹 (二百五十三オ) 劉訓が古事○落葉の宮、空蟬の君、霰餅、牛の異名也。夕顔の上、末摘花(源氏の)、鶉餅、す

し、しのぶすり、花田色(正花にあらず)、あられ釜、霰地

銅、野遊び、顔の紅葉、頭の雪、眉の霜、梅壺、梨子壺、柳

管、柳笛、柳樽、ちまき柱、竹の子笠、網代屏風、同笠、同興、黄なる泉、桜煮の蛸、葛の袴、葛餅、菜菔、菜飯、梅干、蕎麦切、粟餅、からし味噌、ひえきびの飯、胡麻和、銀

鹿、桜町、浅茅生、日蔭、かげろふの小野。○右まきはしき物をしるす。皆雑也。余はなすらへて知べし。恋の詞

恋に定られる詞なし。但、句体を以、定むべし。しかれども、古人、恋の二句めに、あしらひといふことあり。是は、三句の渡り、附こゝろおもくなるときに、詞に恋をもたせて、前句の噂を逃たる也。しかれども、恋句出る毎に恋の詞にて、あしらひ附るにはあらず。一卷のはしりによりて、邂逅この事あり。今の人は、かゝる事をしらねは、私に恋の詞といふを定めて、猥りに恋句の本意をうしなふ。甚々無下のこと也。恋句は特に(二百五十三ウ)一卷の大事也。いかにも実情にあるべし。されどかくいへば、初心の人まどふこともあるべければ、恋句につかふべき詞を少し出さ。あなかしこ、これをもて恋の詞と定ることなけれ。句体によりて恋ニあらず。恋逢恋別一忍一恨一待一無待一思一無思一絶一絶而久一憂一ちぎる一無飽一新枕 恋の奴 恋衣 恋草 恋の病。妬 恥ふ はなしろめる。 嬲 私語 さやく、陸言。 難面人 後めたき人目の関 艶書 待宵 蜘蛛のおこなひ わがせこが来へき宵也さゝかにのくものおこなひかねてしるしも。二道かくる蜘蛛のみにあれたる駒はつなくともふた道かくる人はたのまし。垣間見 ぬれ衣 なき名のたつことにいへり。或書に云、昔、筑前守なりける人のむすめ、継母の讒言にあへり。そのはじめ、蟹の濡衣をかり取て、むすめが朝寝したり

しふしどに置いて、その衣(二百五十四オ)をむすめがぬすめるよしいはせければ、父はらたてゝ、むすめを害しぬ。そのち、かのむすめ、父が夢に見へてよめる歌

へぬぎはつるそのたばかりのぬれ衣長き涙のしるし也けり。これらは名によりて説を設たる也。ぬれ衣のこと猶説あり、略ス。

『後撰(和歌集)』

春くれば咲てふことを濡衣にきするばかりの花にぞ有ける、貫之。

『源氏(物語)』

松島や蟹のぬれ衣なれぬとて脱かへつてふ名をたゞめやは。この外にもあまた詠り。かさなる沓、女のみそかごとするときは、穿たる履のおのづから重るてぬけぬとぞ。まつく駒 人にまたるゝ時は駒のつまづくてふことあり。

恋の占 後朝 きぬぐ。さらば垣 山城朱雀にあり。遊女、此処迄客を送るゆゑに名づく。錦木 昔陸奥にて、おもふ女の門へ立る木なり。その木は、一尺ばかりにして、五色にいろどりたるものゆゑに錦木といふとぞ。『詞花(和歌集)』匣房へ思ひかねけふ立初るにしき木の千つかにならたふよしもかな。『後拾遺(和歌集)』能因へ錦木は立なからこそ朽(に)けれけふの細布むねあはずして。そらだのめ仇 本朝の俗、(二百五十四ウ)語実ならざることをあたといふ。伊達 上におなじ。花美なるをいふ。春心 惚るゝ

色情 誓ふ 男女相互にちかひて契る也。 恋の願ほどき

恋のかなひて後、ねぎごとせし神仏へ、その顔をほどきかへす也。 末の松山浪こす 陸奥に有。 男女のかたき契にたとへたり。 望夫石 同ク山 幽明録昔、貞女あり。 其夫、

役に従ひて遠く国誰に赴く。 弱子を携て餓して武昌北の山上に送り、立望して化して石となる。 又忠州に望夫楼、望夫台あり。 『大明一統志』に出つ。 又『述異記』に載する所、相思岬あり。 これも婦その夫を慕ひ、化して草となりし也。 領中麿山 万葉(集)肥前松浦郡にあり。 左手彦か妻

佐用媛が古事。 石尤風 相伝ふ、石氏の女、嫁して尤郎の婦となる。 尤、出て帰らず。 妻これをおもふて死に到る。 曰ク、吾当に大風をなして、天下の婦人の為に商旅を阻むべし。 故に石尤と名づく。 亦石郵に作る。 李義山が詩に見えたり。 五雜俎 石尤風は海風也。 手児名 万葉(集)(二百五

十五才) かつしかや真間のでこなとよめり。 下総葛飾郡真間郷中の美女也。 或人の云、手児名は武総の方言、女の摠称なりと。 夫 伊勢物語せなは東国の方言、夫をさしていふ。 夫婦 いにしへは男女相互につまと称せり。 嫁 妻

媒 氷人、月老又おなじ。 御 御は女子の惣称也。 房 寢所なり。 閨は宮中の小間なり。 洞房 洞房両株ノ合歡

花水滸伝 翠帳紅閨 肉屏 肉陣、共に房中にいふ所也。 但、句作こゝろえあるべし。 後宮 禁闕中、美人の在所。 美人の名 美人を画 王牆字は昭君、漢の元帝の宮人な

り。 漢書元帝、後宮既に多し、常に見ることを得ず。 乃チ

画工をして形を図せしめ、図を案して召てこれを幸す。 諸宮人、皆画工に賂す。 多き者十萬、少なき者又五萬に減ぜず。 独、王牆肯せず。 遂に見ることを得ず。 匈奴、朝に入て

美人を求め、閼氏とせんとす。 こゝに於て上、図を案じて昭君を以て行しむ。 去に及て召して貌を見る、(二百五十五) 後宮第一とす。 帝、これを悔む。 しかして名籍已に定る。 帝、信を外国に重んず。 故に復人を更す。 乃チ其事を窮案し

て画工を市に棄。 西京雜記「漢書」琴操等の説、或は迭に異なり。 胡地に嫁す 上におなじ。 返魂香 漢書李夫人は李延年が妹、武帝の夫人也。 返魂香の事、世人の知る所

なれば略す。 又、唐の玄宗、羅公遠に就て、楊貴妃が靈魂を見る事あり。 是、漢武の事に似たり。 『五雜俎』に出つ。 香 薰物、蘭奢待、黄熟香、十種香、競馬香、三夕香、吳越

香、沈香、鬪鷄香、小鳥香、住吉香、百和香、奇南香、伽羅、赤梅檀、身すり、柴舟、真香反、初音、大泥、源氏香、香机、香盒、香匙、掛香、匂ひ袋、留寿南。 うつり香の衣 守宮の識

るもりの血を女の肘にぬりおけば、一期消うせず。 もし春心をうごかす時は忽ち消るよし、『博物志』に見えたり。 守宮は蠅蛭也。 石龍子と名づく。 守宮の名は、秦始皇帝、宮人の私あらんことをおもふて、其朱を飼て宮人に点す。 故にこの名ありといふ。 ○時珍が云、臂に点する(二百五十六才)

の説、『淮南』万畢術、『博物志』、『墨客揮犀』、皆其法あ

り。大抵真ならず。恐らくは別に術あらん。今伝わらず。
紅粉べに 皷つづみ 黛くろくま 眉掃まゆかき、鉄漿てつじやう。 男色おとこいろ 美少年うつくしきこゝろ、稚衆わかしゆ。 雞姦けいかん

開卷一笑かいせんいちやう 男色也。 常陸帯ぢごこね 春の部に注す。 筑摩の鍋ちくまのなべ

夏なつの部に注す。 雜喉寝ざごね 冬の部に注す。 密男みつおとこ 於曾おその

風流士みやびひと 今の人癩いまのいんのたはれ男とする者は誤也。 おそとは鈍に

て、俗におそましきなどいふが如し。 癩いんはそにて仮名違

へり。『万葉(集)』に於曾おその風流士みやびひと、又於曾おそ也此君、又

心鈍手向こころおとろてむかひ為在などあるにて知べし。 妹許いもかりゆく 女の許おんなのかりへ行

かよふ也。 紅絹もみ 紅絹もみを恋こひとすること、『三吟未来記』に

へ酒さけさます杖つゑにあぶなきかふるとも、といふ前句まへくみにへはげや

と貰もらふ老らうのもみうら、といふ附あり。これは老人らうじんの廊らうかよひ

と見たる附つきにて、句中くちゆうに遊興ゆうきやうのさま明らか也。しからは紅絹

といふとも句体くみだいによる也。 女房にようぼう 女房にようぼう、男房おとこぼう、元ト宮人の

稱也。今、夫その妻を呼よんで女房にようぼうとす。

妾めかけ 和名(類聚)抄

傍女はなむすめ又同。(二百五十六ウ)

外婦かきめ 指園さしづみ 女によう 貴妃きひ、宮

嬪ひん、姉あね、妹いもうと、郎女らうによう、吾妹子わがむすめ

賤婦せんぷ。 花街はなまち 遊里あそび、乳守ちちまもりの里のさと、古市ふるいち、室むろの津のつ、神崎かみさき、江

口くち、大磯おほいそ、祇園町ぎごんちやう、朝妻船あさつまふね、吉原よしかわの里のさと、嶋原しまはらの里のさと、新町しんまちの

里のさと。 板橋いたばし もろこしの遊女あそびにようめ町也。 板橋雜記いたばしざひ 青楼あおろう 妓門きかど、

妓家きか、娼門ちやうもん、揚屋やうや、浮身の宿うきみよど、浮身の船うきみぶね。 遊女あそびにようめ、遊行女あそびにようめ、

傀儡女くわいにようめ、妓女きにようめ、娼女ちやうにようめ、雛妓ひなぎ、宿しゆく、阿曾あそ比ひ、出女でにようめ、夜発よはつ、辻

君きみ。 女楽にようがく 舞姫まひ、歌舞妓かぶぎ、白拍子しろはつし。 了鬢りやうぶん 妓きの幼稚ちゆういな

るもの。 開卷一笑かいせんいちやう 小三板こさんぱち 上うへにおなし。 水滸みづかほ伝でん 禿かぶら

句くみ會かい髮はつ 織オリ 長ながせす。 禾こめ 稼かのごとし。 今童女いまどうにようめの摠さうしやう稱しやうとす。

白眉神はくびじん 妓院きいんに祭まつる所。 開卷一笑かいせんいちやう 鴉ばうらう老らう 妓楼きろうの老女らうにようめ

也。 開卷一笑かいせんいちやう 私し窠さ子し 隱ひそし売女うりにようめ也。 五雜俎ござぐ 幫間はまかん 牽頭けんとう

又同またどう。 開卷一笑かいせんいちやう 傾城かげま 傾城かげま、傾国かげこくは元ト美人うつくしきこゝろの稱也。

今の人誤いまのひとあやて遊女あそびにようめとす。 陰間かげま 男色おとこいろをひさく者。 飛子ひこ

旅陰間りょかげまなり。 金剛きんぐわう(二百五十七ウ) 野郎のらう、色子いろこ。 伽がや

らふ 江戸えどにて舟ふねまんどちう、大坂おほさかにて伽がやらふ、又ピンシヨ

ト云。 亡なげ八はち 淫蕩いんたうにして仁義にぎぎ礼智れいち孝悌かうてい忠信ちゆうしんの八はちつをしぶぶ者。

曉傘あかつがさ 元禄げんろくのころ、江戸えど吉原よしかわの花街はなまち中、後朝雨ごあさぐりふれば傘かさを

売うれり。これ曉傘あかつがさといふ。其角そのかくがへほと、きす曉傘あかつがさを買かせけ

り、是也。 神媒かみづかみ 正字通せいじつう 『路史』女媧にわが正姓せいせい妖婚やうこん 同どう是

曰い「神媒かみづかみ」。 切字きりじ 或人あるひと、はせをに切字きりじを問とふ。はせを云、

いろは四十七字いろはしじゅうしちじみな切字也と。この言こと、甚おもむきあり。後

世よにいふ切字きりじは、てにをは也。しからは、いろは四十七字、

梅さくらさぞ女かなわ衆かな はせを

此人數船なればこそ涼みかな 其角

梅さくらさぞといひて、かなとは留らず。舟なればこそといひて、涼みかなとは切れぬ也。梅さくらささて女かな若衆哉、とすれば留る也。此人數船なればこそ涼まるれ、とすればこそ切る也。此作者、かばかりのこと弁へぬにはあらざるべし。筆者のたま／＼書あやまりたるを、校合の行とゞかぬにこそあらめ。初心の人は、古人の名におそれて、これさへよしとおもふべければ、そのけぢめをことわるのみ。連歌に、首きれ、袴きずなどいふも、みなてにはの、とゞのはぬゆるの誤り也。愚意此の如しといへとも、はじめ俳諧に遊ぶ人は、てにをはのこと、おもひわきまへずして、まとふこともあるへければ、ちかくつかふへき切字をすこし出す。引すてのや、近江野や、信濃野やなどのやにて、此類は切れぬなり。治定のや、上の詞をおさへて、しかと治定する也。

うたがひのや、もしや、いつにやなど、疑ひたるや也。

ねがひのかな、『万葉(集)』に欲得と書り。それをがな、これをかななど、ねかふ(二百五十八才)こゝろのかななり。

もかな、『万葉(集)』に冀、欲得など書、是もねかひのかな也。治定の哉、うへの詞をしかとうけて治定する也。桜哉、柳哉の類なり。過去のし、いひし、さめし、見し、ありし、行し、越しなど也。過去のしは切れぬなり。現在のし、おもし、かろし、来し、青し、白し、赤し、おかし、恥

しなどなり。此現在のし、切れるなり。未来のし、見たし、聞たし、有ぬべし、すべし、むかふべしなど也。未来のしも切れる也。ふのぬ、きかぬ、見えぬなど、ふにかよふぬは、みな切字にあらすとしるへし。ぬ、これを畢ぬのぬといふ。聞ぬ、聞ぬる、来ぬ、来ぬるなど、すべてるもし附らるゝぬは切れるなり。つゝ、つゝは何つくとかへしたる詞也。又、ながらにかよふつゝも有べし。下知、下知切

は、みよ、せよ、まて、いけ、きけよなど、人に下知する如くなるをいふ。か、たが、これかなど、うたかふこゝろあり。切字也。ゆ、よりにかよふゆは切れず。聞ゆ、おもほゆなど(二百五十八ウ)ゆるにかよふはみな切れる也。みゆ、うくす、つぬ、むるうのもじを上におかされはみゆと留らす。よ、これも下知切也。又物を呼かけたる所もあり。にて、にてはかなに通ふ也。故に哉とめの発句の時、第三にてとは留ぬなり。そ、ける、なる、あるなどあるべし。そといふて、けり、なりとはせず。こそ、けれ、あれ、なれなどあるべし。ける、ある、なるとはせぬなり。なん、そといふにおなじ。らん、まづは、うたかひたるてにはなり。句中にやもじ有へし。めり、なりとかよふ。又ねがふこゝろもあるべし。かし、是もねかふこゝろあり。又いひすてたる所もあり。一句自他、これは初心の人、まゝあること也。たとへは、朝風さむきわかなつむ人、是、朝風さむきは自也、若菜つむ人は他也。余はなずらへてしるへし。

題 いにしへは物にふれ、事に感じ、こゝろをたねとして、すぐに歌よみ出たれば、題詠だいぎてふことはなし。中ごろより題詠といふことなん、はじめりける。凡、詩歌連俳ともに(二百五十九才)その実情より、不用意にして秀逸いっ多し。題を得て詠ずる時は、言をかざり、おのれがこゝろにもあらざることさへ、いひ出せるあり。されど、題詠に秀逸なしといふにはあらず。先つ題のおもむきを解げすべき也。たとへは、花の題ならば、近くは庭前に咲そめしより、花林のおもかげにもこゝろを移し、さて朝日、夕日、露風などのあるへき折すかたの風姿をおもひめぐらし、すべて実情より案し出すべし。初花、初時鳥、初鳥、初雪など、すべて初の字附たる題は、初の字の詮せんなくてはかなはず。初心の人、よくくおもふべきもの也。一字題 梅、桜、月、花、雪などの題也。また、千鳥、紅葉、時雨など二字に出たるも、一名両字はすべて一字題と心得べし。結題 物をよせあはせて、二字より五字、六字に至る題也。たとへは初春の霞、雪中の千鳥などの題也。難題 三字、四字、五字の題、みな実字のみにて、むづかしき題をいふ。経文題 『法花経』その外、何の経にても一句(二百五十九才)とり出て題とするなり。詩句題 詩句をとり出て題とす。又、詩一編のこゝろを詠たるもあり。組題 或は五首、十首、又は千首、題を組あはせて詠ずるを組題といふ。傍題 これは、題の外にことものを詠するを、傍題とて嫌ふこと也。落題 たとへは山

路の花といふ題にて、花のこのみ称せうして、山のこゝろなきか落題也。兼題 歌合などの時、かねて題を定め置也。探題 席上にて、各題をさくり得て後に詠ずるをいふ。古事古歌取 題より古事古歌の生るゝは苦しからず。古事古歌よりおもひよせては作るべからず。古事はこなして遣ふへし。古歌とり又大切也。已上、和歌の格也。俳諧又これに准すへし。題はすべて、古人の作例ある、やすらかなる題をえらふべし。あなかに珍らしからんせんとして、ことやうなる題を出す時は、初心の人、迷惑めいわくして、かへりて秀逸なきもの也。○五老井許六の説に、発句を案(二百六十才)ずるには、題の曲輪をはなれて案すへし。題の曲輪をはなれざれば、おのづから等類とうい多くして手がらなし、といへり。甚たうけがたき説也。いかにとなれば、題の曲輪をはなれて案じなは傍題となるなり。これは、古人の題を得て後に題を忘れよ、といひしをおもひたがへたるなるへし。附合 発句は、一ふしありて、たけ高く作るへし。脇は、その時節をのかさす、発句の余情を補ふべし。第三は、転句の場なり。是又たけあるやうに作るへし。古人、て、に、らん、もなし留とどの外、第三にゆるさず。はその句を優美ゆうびになさんが為也。この三句は、たとへは天地人の三才也。発句の天、先生じ、脇句の地、次に生じて、陰陽いんよう兩儀成なる。しかして後、第三の人、その間に生ず。人は是、天地陰陽の氣を得て生すといへども、その姿天地に異ことなり、故に第三にて一転てんする也。四句め

より八句めに到りて、草木禽獸、万物なる。裏うつりより人情おこり、喜怒哀樂生ず。二の表より名残の裏に到りて、生死流転、善悪賢愚、治乱豊凶の差別あり。名残の裏に(二百六十ウ)到りて、性善の本心に帰して、天下太平のかたちを示す。一卷のはこひ此の如し。家兄鷄忠云、附合は夫婦の如くすべし。兄弟の如くすべからず。夫婦の親しみ、是より切なるはなしといへとも、元他人也。兄弟、牆に聞とも、元ト同胞なり。この心をもて附合をすれば、前句の噂をのがるへしと。この言、あぢはひあるに似たり。附合に五体あり。五体とは、情、頃、粧、所、走、遣り句なり。支考、七名、八体を製す。畢竟、附句は自他の運ひによる。其角云、附合は、さし合くりといはれんより、上手といはるゝこそよけれど。この説、更にことわりありともおほえず。俳諧のさし合は、詩に平仄あるが如し。詩の平仄をとゝのふるは難く、はいかいのさし合を繰るゝは易し。附合にさし合をくらずしていはんより、附合をせで止むにはしかず。 **点取** 世に歌合てふ事の出来しより、歌はあらぬすかたになりゆきぬと、あるやんごとなき御方の仰られし、ことわりありておぼゆ。俳諧も点取といふことのさかりになりしより、ひがこと多くなりぬ。近ころは判者の聞と(二百六十一オ)いふ事ありとて、まけじたましひのをのこら、おのかこゝろにもあらぬことをさへ、いひもてゆくまゝに、はては、文台のかたはらにて、むかひ火つくり、あらそひ罵るめり。風流の本意をうし

なへるに似たり。かゝる事よりして、俳諧はあらぬものと、詩歌者流はあざけり笑ふぞかし。予、これが為に嘆息することひさし。 **偷句** 偷句は、今、点取を専らする人の上に、まゝあること也。たとへは、きのふの席に誰くがめづらしき詞、或は古事人名などいひ出れば、けふははや、その詞を竊みて、おのれが有とするあり。古人は初心に古歌どりをさへゆるされず。しかるをいはんや、眼前他の句をうばふことやある。こゝろあらん人は慎むべきこと也。 **犯句** 自分の達者に任せ、席上老俳の言を用ひず、一卷の式を犯して、ほしいまゝに句をすえる也。 **宿構句** 今の俳諧に遊ぶ人、かねて長短の句を作りおき、その席に臨み、前句のしかるべきあれば則、その句を附る(二百六十一ウ)ことありとぞ。その句は、いかにも巧にして、はなやかなれども、前句より生れたるにあらざるが故に、さながら木に竹を継合たるこゝちぞせらる。むかしの俳諧は、一席半歌仙に過ず。今の俳諧は、半日百韻満尾す。古人の遅吟なるにあらず。一卷の吟味細密なるがゆゑ也。或人云、むかしは句案して附句を出せり。今は附句をおもひ出してすえる也と。初心の時より、かやうの事をわかまへて慎ざれば、生涯上手にはならぬ也。『魏志』に云、王粲、善属文、学筆便成、無所不改定、時人常以為宿構。かゝれば、もろこしにも宿構句といふことはありけると見えたり。 **画譜** 字書に、讚は解なり、哀なり、美德を発揚するなりとありて、多くはその事を

讚美する也。或は無を有とし、無名になづけて画に声を添る也。予、總角のころ、奥州行脚の僧あり。その人云、出羽の尾花沢の里正の家に、はせをの画讚一軸あり。その家、相伝へていふ、むかし某の公卿、ゆゑありて当国に左遷せらる。(二百六十二才) 里正の先祖、よくこれに遇す。よりてそのこゝろさしを感じ給ひ、配所のつれづれに自画一張を与へらる。乃、家に伝へてこれを蔵す。その画、相撲の画也といひ伝ふ。しかれども、その形相撲の模様にあらず。右にミ、此の如きものあり。左りにミ、此のごときものあり。既に數百年を経て、紙面も又あざやかならず。元祿のはじめ、はせを奥州行脚の日、此里正の家に寄宿す。主人、その古画をもて、はせをに讚を請ふ。はせを便ちこれに讚す。

東風羅神

ミ

裸身てあらそふものや月と風 はせを

西かつら男

ミ

この画讚、実に嘆美するに堪たり。ミに凡を加ふれば風となり、ミに月を加ふれば月となる。これ(二百六十二才) 無を以て有とし、無名に名づくるもの也。この讚、すべての俳書に見えず。故に、こゝに載するものは愚が古人をおもふ老婆心也。按するに、『奥の細道』に、三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す云云。あるじの云、是より出羽の国に、大山を隔て、道さだかならざれば、道しるべの人をたのみて越べきよしを申す、云云。肌につめたき汗を流して最上の庄

に出つ、云云。尾花沢にて清風といふものを尋ぬ。かれは富るものなれども、志いやしからず。都にもをりくかよひて、さすがに旅の情をも知りたれば、日ごろとゞめて、長途のいたはりさまくにもてなし侍る、云云。今の里正はこの清風が児孫にやあらむ。田舎にはかゝることも猶多かるべし。

俳諧歳時記雑之部 畢 (二百六十三才)

このころ書肆東四郎、『俳諧歳時記』てふ書もて、これにはしかきを乞ふ。著作堂主人はやつかれ、いまたしらされとも、しれるかとし。其しれるは、そのこのめる道の、予かこのむみちと同じければなり。やかてこの記をとりて審に見る。見終て考へ、ふたゝひみて深くおもふ。嗚呼、此歳時記は尋常の歳時記にあらず。歳時記中の歳時記にして、古を檢、今を校て到れり尽せり。そもくいにしへの歳時を(二百六十三才) いはゝ、神代より春夏秋冬の名はありて、十二月の月などいふ分ち聞えず。月立、月隱もおほよそ押あてにて、すへて三日五日ほととの違ひはありけむかし。まつ空のけしき、ときくりにわかり、花の開落、月の清濁、或は木草のうへ、虫の出没をもてかゝなへ、菜の花の黄金色なす頃は苗代時としり、ほとゝきす来鳴は田うゝるときとし。かれにつき、これにつきて、其ほとくりにしりもて行ゆゑ、物ことみな正かにて、暦の渡りきたる後よりも、正しき(二百六十

四才)事はいと優^{まさ}りけむ。暦^まわたりてよりは、一歳に十二月のわかちあり。其一月には三十日と三十日^{みそか}たらすのけちめさへあり。そのころよりこそ、いよくこちたく、さまくくのさたはしまりたれ。神産^{かんむすび}霊の神のむすひの種より、漢^{からくに}國の道さへそひ、其月はなにくく、その日はなにくくと、政^{まつりごと}にも齋^{いはひ}日にも悉く制度^{さだ}さたまる。さるにより、日和^{ひより}はまた夏めかねとも、端午の節にあたれば、世のなみくくに、うすもの着つゝ、節をつとめ、折ふしは汗(二百六十四ウ)拭ひながら、重陽のいはひとして、賤か子も布子着て、きくの花たつぬ。いにしへのさためなきは、其時くくのよろしきに押あつるかとおもはれ、いまのさたまりのちは、かへりて暑しさむしの、やゝたかひあるときは、いさゝか時候^{とき}の違へるのそしりあり。されとも、此さたまれるところ、すなはち歳時にして、人の代となりては、制度^{さだ}なくては、いかむともすへなし。其沙汰とも、つはらくにかい集たるはこの記にして、此記は歳時の(二百六十五終オ)尤くはしきものなり。豈俳諧のみの記ならむや。そをしも『俳諧歳時記』といへるは、作者の俳諧になつめる名にして、世の人は、おのれくかそのみちの歳時記と見むも、また嫌ひあらすと。享和三年癸亥の臯月、をはりのあま彦かしるす。(二百六十五終ウ)

江戸曲亭先生著

俳諧いろは韻 小刻一卷 近刻

此書は四季の詞をいろは^{おのく}に分にして、各十二月に配^はし、傍^{かたはら}に小圈^{けん}を施して、神、釈、草木、生類句去等の識^{しるし}とす。俳諧席上に携へて甚だ調法なる書なり。

享和癸亥暮春発行

書肆

東都通油町

葛屋重三郎

浪華順慶町

柏原屋清右衛門

尾府玉屋町

永楽屋東四郎(二百六十六オ、奥付)

注

「日本文学研究」第四十八号と同第六十二号、大東文化大学日本文学会、二〇〇九年二月と二〇二三年二月。

付記

本稿を以て、『俳諧歳時記』の翻刻(一)と(十六了)を終わる。なお、『俳諧歳時記』と馬琴著作との関連等については別稿を用意する予定である。